

## 武庫川女子大学 武庫川女子大学短期大学部

第3号

# FDニュース



### ● 目 次 ●

- |                      |  |
|----------------------|--|
| [1] 本年度の活動方針         | [4] 私のティーチングティップス                      |
| [2] FD 推進委員会の活動報告    | [5] 「私語に関する学生アンケート調査」からより良い授業を考える！（続編） |
| 1 前期の授業公開を終えて        | [6] FD 豆知識                             |
| 2 FD 公開研究会（第1回）の報告   | [7] シリーズ授業                             |
| [3] 学科FDの取り組み        | [8] 編集後記                               |
| 健康・スポーツ科学科、健康・スポーツ学科 |  |

## 本年度の活動方針

FD 推進委員長 高橋 享子

平成20年度より、大学設置基準に基づき大学・短期大学において組織的FD活動が義務付けられています。また、同年12月には、中央教育審議会から「学士課程教育の構築に向けて」の答申が出され、グローバル化・ユニバーサル化における我が国の「高等教育の質の保証」が問われています。学士レベルの資質能力を備えた人材養成が課題とされ、各大学における「学位授与の方針」、「教育課程編成・実施の方針」、「入学者受入れの方針」の明確化が求められるとともに、「教員、大学職員の研修の活性化」が明記されています。

このような動きを受け、本学は、まず平成19年度末に「武庫川女子大学FD推進委員会規程」を制定して「FD推進委員会」を立ち上げ、授業改善・改革に向けて様々な活動に着手しました。続く平成21年度には、「武庫川女子大学短期大学部FD推進委員会規程」も整えられ、前年からのFD活動を継続して更なる展開を図っています。

昨年、創立70周年を迎えた本学院は、教育の原点である「立学の精神」に立ちかえり、人格淘汰の教育と専門教育とが理想的に融合する教育を目指すこととし、次の80周年に向けた基本理念を掲げています。すなわち、男女共同参画時代の戦略として、「グローバルな視野を持った指導的女性の育成」と「女性研究者の育成」、さらに「女性の得意とする分野に教育研究の力と資源を集中し、女性の活躍が求められる新分野を開拓」を策定し、10ヵ年計画で推進することになりました。

これらの目標を本学の教育において具体的に実践するには、教職員の目標に対する共通理解と、講義・実験・実習・演習など個々の授業において、学生に対する効果的な教育展開が不可欠であると考えます。そこで、平成22年度FD推進委員会では、学生のための「教育力の向上」を目指し、「大学授業改善・改革」を中心としたFD活動に取り組むため、下記に示す4つの小委員会を立ち上げました。

FD 推 進 委 員 会	大学授業改善・改革委員会	授業公開により、わかり易い授業方法などを開示して参観者との交流を図る
	成績公開検討委員会	専任教員への成績公開にあたり、開示方法などの検証をおこなう
	FD講演委員会	学内外の講師による講演会や研究会を開催し、FD活動への共通理解を得る
	FDニュース編集委員会	学科FD活動や、FD推進委員会の活動状況などを、学内外へ情報発信する

これらの小委員会は、各学科から選出されたFD委員が中心となり、学科の意見を反映させながら、大学全体のFD活動を企画しています。今後、各学科でのFD活動をさらに活発に展開していただき、FD推進委員会の諸活動が、多くの教職員の共通理解の上で、組織的な取り組みに繋がっていくことを願っています。

## FD 推進委員会の活動報告

### 1 前期の授業公開を終えて

本年度は「学生にとってわかりやすい授業を行う」ための一手段として、「学習効果の向上を図る授業方法」に重点を置く活動を行っています。「学習効果の向上を図る」といっても、さまざまな方法があるはずですし、授業者も気がつかないで行っている例もあるでしょう。

そこで、普段行っている授業を見直すきっかけとして、まずは原点に立ち返り、日々行なわれている授業を公開していただき、それを参観することで、先生方のいろいろな授業技術を学ぶことから始めました。90分の授業の中で、先生方は独自に様々な工夫をされています。学生は、多くの先生の授業を比較して体験することができますが、授業者である先生方は、他の先生の授業を見るチャンスは、あまりありません。

6月21日から始まった授業公開では、公開授業数が70クラス以上あり、参観された先生方からのアンケートには、「学生が活発に活動している様子に感心した」「参観した授業で行われていた授業方法を自分の授業にすぐ取り入れたい」などポジティブな意見が寄せられました。一方、公開した授業者からも「自分では気がつかなかったことを丁寧に指摘していただきありがたかった」「同じ問題を抱えているという意見に、私だけではないという勇気が出た」「学生も教師も普段より緊張感が出てよかった」など授業公開に肯定的な意見が返ってきました。アンケートからではありませんが「時間の都合がつかず参観できなかった」というご意見も頂いております。

多くのコマ数の公開授業でしたが、教室の場所や自分の授業時間とのぶつかりなど参観できない先生方も多くおられたことも事実です。仕組まれた研究授業ではなく、普段の授業の公開だからこそ多くの問題点も見え、授業者も参観者も得るものが多かったと思います。後期は、さらに多くの授業公開にご参加いただけることを期待しています。

(FD 推進副委員長 小野賢太郎)



### 2 FD 公開研究会（第1回）の報告

7月21日（水）、名古屋商科大学の小野裕二教授（法人理事を兼任）をゲストスピーカーとしてお招きし、FD 公開研究会を開催しました。名古屋商科大学は、組織的に授業への取り組みをいち早く行ってきた実績をもっており、その名古屋商科大学の中で、9年連続 Teaching Awards（学生の授業評価を参考に、教員の上位1割が「優秀教員」として表彰される学内の賞）を獲得している小野先生は、日経キャリアで「カリスマ教師」と紹介されています。

今回の研究テーマは「学生満足度を高める授業とは -顧客満足（CS）の観点から-」。

すべての授業が「座席指定制」で、厳格な出席管理をしている（全科目の平均出席率は約90%）一方、学生満足度を測るひとつの指標である「学生の授業満足度調査」を重視する名古屋商科大学の取り組みは印象的な話でした。特に、学生満足度と関連の大きい項目は、「学生の熱心度」「学生の興味・理解・意欲」「教員の熱意」「適切な指導・助言」「良好なコミュニケーション」であり、「学生の理解度」は関連の小さい項目であるというデータは興味深いものでありました。本学にとっての理想的な授業のあり方を考えていく上で、有益な情報となると考えられます。

公開研究会という形式はFD 推進委員会にとって初の試みであり、研究会らしく、できるだけ多くの意見交換ができるように計120分のうち、質疑応答の時間を40分ほど設けました。教職員38名の参加者から多くの意見・質問があり、双方向のコミュニケーションができた密度の濃い研究会であったと思います。

(FD 推進委員 赤岡仁之)



FD 研究会風景

## 平成22年度 FD 推進委員会メンバー一覧

No.	役職	所属	氏名	No.	役職	所属	氏名
1	委員長	食物	高橋 享子	11	委員	建築	大井 史江
2	副委員長	教育	小野賢太郎	12	委員	音楽	松本佳久子
3	委員	日文	西山 明美	13	委員	薬学	黒田 幸弘
4	委員	英文	三浦 秀松	14	委員	共通	西尾亜希子
5	委員	教育	藤井 達矢	15	委員	教務部	土井 裕司
6	委員	健康	渡邊 完児	16	委員	教育	北口 勝也
7	委員	心福	半羽利美佳	17	委員	法人室	瀧居 豊
8	委員	環境	井上 雅人	18	委員	情報システム室	私市佐代美
9	委員	食物	北村 真理	19	委員	教務部	松本 全弘
10	委員	情報	赤岡 仁之	20	委員	教務課	石田 有紀

## 学科 FD の取り組み

健康・スポーツ科学科 幹事教授 永田 隆子  
健康・スポーツ学科

健康・スポーツ科学科のFDの取り組みを考えるに、約40年前に遡る。そこにはすでに流れがありました。一例ですが、臨海実習(現マリンスポーツ実習)やスキー実習(現スノースポーツ実習)の野外実習(学外実習)に見られます。当時、学科は文学部教育学科体育専攻と短期大学部体育学科でした。臨海実習では、「遠泳ができる」を到達目標にして、能力別・班別学習を用いていました。またスキー実習においても「パラレルターン、ウェーデルンができる」を到達目標にして、同じく能力別・班別学習を用いていました。班で指導を担当するのは、主に学科の専任教員です。両実習ともほとんどの専任教員が実習に関わり、そして到達目標に向かって、担当班を導くことになります。1つの科目を多くの教員が同時に持ち、その成果をお互いに評価するわけですから、共通項でくられるポイントを理解し、実践、指導しなければ、全員が到達目標に達しないことになります。ここにFDがありました。私たち教員は、隣で指導される同僚教員の指導法を目のあたりにし、それをお互いの刺激としました。アイデアマンは、多くの発想から新しい指導技術を生み出します。アレンジマンは、アイデアマンたちが発想した指導技術等をさらに改良し、自分独自の指導技術へと発展させます。このようにお互いの刺激によって、お互いに学び合うことから、深めていきます。また、スキー実習では、専門家である現地スキースクール指導員に講師をお願いし、参加教員全員で実技研修会も実施してきました。時には、指導法について、参加教員および現地スキースクール指導員と深夜1、2時近くまでディスカッションにおよぶこともありました。



このように、健康・スポーツ科学科では、FDという言葉を特別意識するのではなく、自然発生的に積み上げられてきたように考えられます。同様のFDには、卒業論文の審査や発表会にも見られます。

近年、FDという形が整えられるようになり、健康・スポーツ科学科でも、多くの機会を捉えて教員が参加するようになってきました。大学授業研究会において学科教員が発表する場合、多くの教員がこれに参加しています。また、学科のFD推進委員が中心となり、FD実施状況を調べ、そこから出てくる現状と課題もまとめております。

今年度から取り組まれる6月21日～7月26日の「公開授業」には、4人の専任教員が名乗りを上げ、講義が2クラス、演習が2クラス、実験実習等が2クラス実施されます。いずれも、自らが成長しようとする姿勢からです。今後は、計画された「公開授業」という枠にとらわれず、お互いが成長するために、いつでもどこでも学び合える状況をつくりたいと考えております。

### 健康・スポーツ科学科において実施しているFD

学科打ち合わせ会	学科長より授業受講態度や授業の展開についての提案があり、各教員より授業についての報告がなされ、その報告をもとに度々ディスカッションがなされている。
教育内容検討委員会	学科教員9名(平成22年度)が教育内容およびカリキュラム内容について定期的に議論し、毎年の教育内容およびカリキュラム内容について評価および改善を行っている。
卒業論文発表会	毎年度特別学期に、全学科教員が参加し、卒業論文発表会を開催している。教員は、同僚教員が指導した学生の卒業論文発表会に対して、質問を行う。これは、教員の教授力および指導力向上に繋がっている。
学外実践実習における情報交換	健康・スポーツ科学科における学外実践実習は、健康・スポーツ実践実習とスポーツ指導実践実習が開講されている。これらの学外実践実習には、全ての学科教員が学生指導にあたる。教員間で充実した実習を展開するための情報交換を行っている。
野外実習での現地指導員による指導法講習	学科の教員が共同で指導にあたる「マリンスポーツ実習」「スノースポーツ実習」では、指導目標、指導内容および指導方法についての共通理解を図るため、現地専門指導員を講師にした指導法講習を実施している。
健康・スポーツ科学会における活動	本学科の教員および学生が運営する健康・スポーツ科学会では、定期的に有識者やスポーツ選手を招聘し、講演会を開催している。また、毎年度、学生が企画編集を行う冊子「躍動」(900部発行)は、学科内での情報交換に役立っている。
教員間における情報交換	教員間のフリートークによる、授業改善に関する情報交換を頻繁に行っている。健康・スポーツ科学科では、教員がお金を出し合ってコーヒーを随時飲めるようにしている。その場所での情報交換は非常に有意義であり、時としてベテラン教員から新任教員への指導の場に変わる。
その他	スポーツには種目特性があり、実技指導には、種目に応じた研修が必要になる。本学科の教員は、(財)日本体育協会のコーチ研修会に多数参加している。



# 「私のティーチングティップス」 情報メディア学科 教授 丸山 健夫

## —大学で座席指定?—

2008年4月。それまでの文学部勤務から、生活環境学部情報メディア学科へと「転勤」しました。新しい学科では、受講学生が200名程度の大教室の授業も担当することになりました。まあ、200人もの学生を、90分黙らせるのは、芸能人でなければ無理とも思えました。

予想通り、当初はさんざんな目に会いました。ずいぶんと困っていると、同僚の赤岡先生が、「座席指定は効果的ですよ」と教えてくれました。とは言っても、200人の座席表となると、何だかためらいがありました。それに、今さら小学校でもない、大学なんだからと、座席指定そのものを自分の講義でやること自体にも、本当のところ抵抗がありました。でも、そんなに効果があり、学生も教員も気持ちよく講義ができるものなら、ちょっとは面倒でもやってみようと思いました。

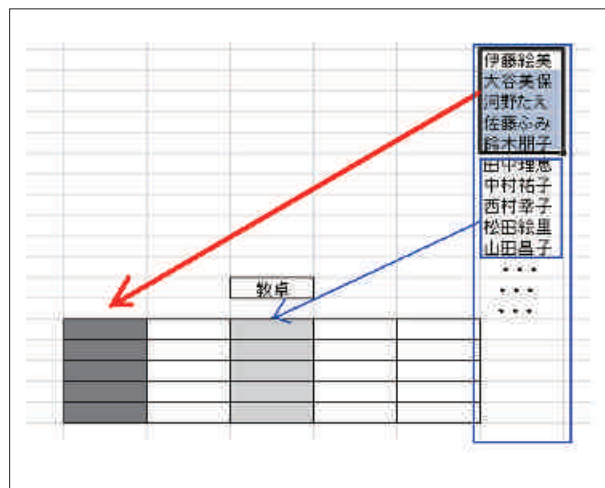


図1. エクセルにコピーして座席表を作る

MM-902 情報学 (日曜日1限)

教卓

伊藤絵美	XXXX	田中理恵	XXXX	XXXX
大谷美保	XXXX	中村祐子	XXXX	XXXX
河野たえ	XXXX	西村幸子	XXXX	XXXX
佐藤心み	XXXX	松田絵里	XXXX	XXXX
鈴木朋子	XXXX	山田昌子	XXXX	XXXX

教卓

1	6	11	16	21
2	7	12	17	22
3	8	13	18	23
4	9	14	19	24
5	10	15	20	25

私の座席は 番です。  
左から 列目 の 前から 番目 です。

.....ここから先を切り取って盛付してください.....

私は、( )番座席に着席し、講義に直接関係しない unnecessary 私語はしません。  
指定座席以外に着席した場合は、平常点20点は0点となることを承知しています。  
武蔵川女子大学生生活環境学部情報メディア学科 ( )年 ( )クラス ( )番

自筆署名 ( )

平成21年 ( )月 ( )日

図2. 座席表と誓約書

さて結果は? 確かにきき目がありました。

自由席とは明らかに違いました。「座席指定」は、私語に対して、かなり有効だと実感しています。

- (1) 座席表の作成  
MUSESの受講者名簿のデータを、コピーすると、比較的簡単に座席表が作れます(図1)。同じクラスの学生が、となりの席にならないようにするのがコツのようです。
- (2) 誓約書の提出  
座席の確認と意識を高めるために、座席表と「しゃべりません」という誓約書をセットにした文書(図2)を配布して、自分で座席番号を確認させます。上半分は学生が持ち、署名の部分は切り取って回収です。
- (3) 警告カードの利用  
警告カード(図3)を発行し、減点すると宣言しておきます。注意してもおさまらない場合は、手渡します。

私語・警告カード No

学年	クラス	番目	氏名
----	-----	----	----

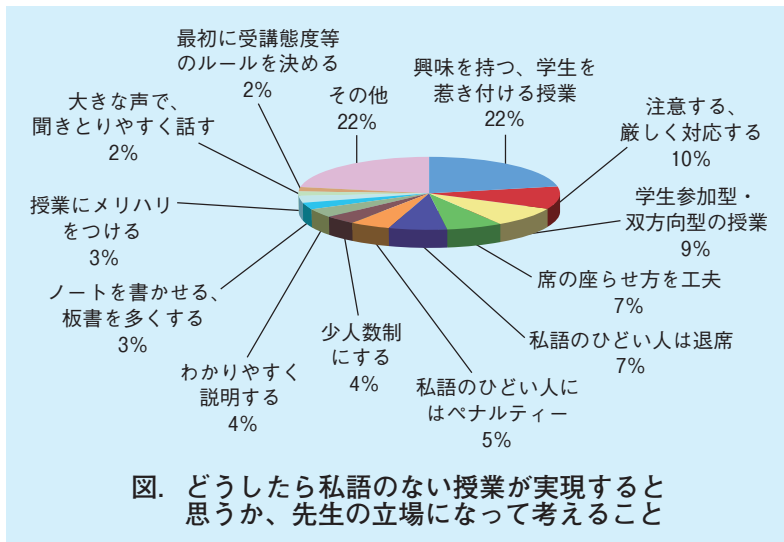
2009年 月 日

図3. 警告カード

## 「私語に関する学生アンケート調査」からより良い授業を考える！（続編）

前号に続き、「平成21年度 私語に関する学生アンケート」（教務部実施）の自由意見について一部を紹介します。

Q5「私語の原因は何だと思いますか」（記号選択式）の回答で最多の、「授業内容がおもしろくないから」（16%）に関しては、「面白い授業をすれば私語は減る」「学生を惹きつける授業をしてほしい」という意見が数多くありました。2番目、3番目に多かった回答はそれぞれ「私語は楽しいから」（14%）、「人数が多いから」（11%）でしたが、4番目に多い「授業が分からないから」（11%）に関しては、「私語をするのはわからないことがある時なので、わか



りやすく説明してほしい」、「先生が自分一人だけでやっているような授業はやめてほしい」という意見が多数ありました。

Q9「どうしたら私語のない授業が実現すると思うか、先生の立場になって考えること」の回答は、「興味を持つ、学生を惹きつける授業をする」が突出して多く（左図）、2番目以降は順に「注意する、厳しく対応する」、「学生参加型・双方向型の授業をする」、「座席指定」、「私語のひどい人は退席」と続きました。厳しい注意や強制退室などには即効性があり、学生はこれらにある程度は期待しているようです。しかし、それらよりも学習への動機づけが向上するような授業運営を望んでいることがうかがえます。自由意見の中には「私語をするのは一部の学生なのに全員が

叱責されるのは不愉快」という意見も少なくありませんでした。権力に任せた私語対策に甘んじていると学習への動機づけが高い学生の意欲までも削ぐことになり、指導が過ぎれば「私語が生じるのは学生ばかりが悪いからではない」と反発を買うことになるでしょう。自由意見には授業運営に関するものもあり「プリントさえ入手すれば試験に合格できるような授業ではなく、授業を聞いていないと合格できないようにすべき」や、「先生が一方向的に話すのではなく、学生が理解しているかどうかを確認しながら授業を進める」など、当を得た意見もありました。教員はこのような授業運営を実現するためにFD活動を実施しているわけですが、これらの意見は教員にまだまだ改善の余地があることを示唆しています。教員と学生がおたがいに「あなたの方が悪い」と思っていると解決は程遠くなります。どちらが悪いのではなく、模範となるべき教員がまず改善すると学生もきっと何かを感じるに違いありません。

（FD推進委員 黒田幸弘、藤井達矢、石田有紀）

## FD豆知識

### キャップ（CAP）制とは

キャップ制とは、1年間または1学期間に学生たちが履修登録できる単位の上限を設ける制度のことである。その目的は、学生たちの過剰な履修登録を防ぐことで学生自身の自主的な学習活動を促すこととされ、文科省の調査では、2006年度現在、全大学の約64%がキャップ制を採用している。

キャップ制は、大学教育の基本制度の一つである単位制度の中で用いられる。大学における学習量を「単位」で表すという制度は戦前にもあったが、当時は授業時間のみを計上した。戦後になって、「1単位の履修時間を教室内及び教室外を合わせて45時間」（1991年以前の大学設置基準）、言い換えると予習、授業、復習各1時間の計3時間を15回（標準45時間）行い1単位と定められた。卒業要件としての修得単位数は124単位以上であり、大学・学部・学科によって大きく異なる。1991年の設置基準の改正では、授業と自習の学習量の配分に大学の裁量が認められたが、今なお自主学习が軽視されているのが実状である。

近年、大学教育の質保証が問われ、単位制度の実質化が求められている。キャップ制が普及する背景には、学生自身の自主的な学習を促すというキャップ制独自のねらいがある。そこでは、教員側には授業中に自主学习を促す工夫が、学生の側には十分な予習・復習・発展的な調査研究等を行う学習習慣を身につけることが求められている。

〈参考文献〉 大学審議会（1998）「21世紀の大学像と今後の改革方策について（答申）」

寺崎 昌男（1999）『大学教育の創造』

（FD推進委員 西尾 亜希子、私市 佐代美）

# シリーズ 授業

## — 啐啄呼応の教育 —

教育学科 教授 山崎 彰  
幼児教育学科

武庫川学院に奉職させていただいて、1年あまりが経ちました。

これまで、私は、大阪の府立高校で19年間数学を担当し、その後、大阪府教育委員会では、小学校から高校までの初等中等教育機関における教科指導を担当してきました。

初等中等教育機関においては、授業を中心として教育が主たる目的であり、小学校、中学校、高等学校の教員として必要な実践的授業力を身に付けるため、教育実習に始まり、初任者研修、2年目のフォローアップ研修、10年目研修、ミドルリーダーの中堅研修など、教育委員会では、そのキャリアステージに即した研修システムを用意しています。また、学内、市町村、都道府県、さらには全国レベルでの教科別の授業研究組織が自主的に組織されており、研究授業などを通して授業力向上が図られています。

一方、大学では、研究と教育という二つの柱がありますが、教育という側面については、初等中等教育機関のようなシステム、明確な判断基準はなく、個人に委ねられてきたという印象を持っていました。実際、私自身の大学生活においては、先生方の研究業績、研究に対する姿勢そのものが教育であると捉えてきたように思います。

本学に来て、大学においてもFD活動を質の高い教育を行うために重視し、様々な新しい取り組みがされてきていることを知りました。また、一方で、「初期演習」という聞き慣れない講座に、最初は不思議に思っていたのですが、1年生の担任を持ってみて、大学教育を受けるに当たっての基礎作りという点で、その大切さが理解できました。以前、教育活動は、啐啄呼応の関係が大切であると先輩教師から教わりましたが、まさに、大学においても、そういった仕掛けが必要となってきているのだと感じました。

その背景としては、私が高校に進学した1965年は高校進学率が70.7%、大学に進学した1968年は大学進学率(大学、短大を合わせて)が19.2%でしたが、現在の高校進学率は96%を超え、ほぼ希望者全入となっており、2009年の大学進学率は56.2%となっています。その結果、高校には、その年代のほぼ全員を対象とする最終の意図的教育機関としての役割が求められるようになってきたことと合わせて、大学に対する社会的ニーズにも大きな変化が現れてきているのだと実感しています。

大学設置基準が改正され、授業の内容及び方法の改善を図るための組織的な研修及び研究の実施が義務づけられましたが、他大学では、FSD活動(Sはstaffとstudent)として取り組んでいるところがあります。本学においても、昨年度から、全学を挙げて私語撲滅運動が行われています。「聴く態度その姿が美しい」のキャンペーン用語のように熱心に授業を聴く学生が増えるように教員の授業力向上に一層努めなければならないと考えています。



### 編集後記

近年、授業に小グループ討論を取り入れる例が増えてきているそうです。この学習法は意思伝達能力や協調性を育みやすいだけでなく、それまでの自分が持っていなかった視点やまったく別の考え方に気づきやすいという点で優れていると言われています。実際に学生どうしの議論を傍で聞いていると、一人の意見によってほかの学生の考え方が大きく変わることがよくあります。これと同じことが教員の自己研鑽や教育組織の改革にもあてはまるでしょう。教員間で率直かつ前向きに意見を交換することによって新しい視点や他の立場にいる人の考え方を知ることができるのではないのでしょうか。授業公開や学科FDを通じて今よりも気軽に意見を交換できるような雰囲気ができれば、さらに優れた学生を社会に送り出すことができるのではないかと期待しています。

【FD ニュース編集委員会】

黒田幸弘、藤井達矢、西尾亜希子、私市佐代美、石田有紀

